



まちだ人 漫画家

西村宗

最盛期には新聞・雑誌の連載4本を抱え、1日17本を描いたという売れっ子漫画家、西村宗さん。現在は玉川学園の自宅で膨大な資料と格闘しながら、昭和の歴史をたどる一コマ漫画を描いている。

代表作の四コマ漫画「サラリ君」は1980年から30年間、産経新聞で連載された。「ニュースペーパーに載せるには、風刺とウィットがないとだめ」ときつぱり。サラリマン家庭の日常をほのぼのと描きながら、時として社会への皮肉を痛快にこめる作風で、長らく読者に親しまれた。

毎朝掲載される漫画は前日に描くと決めていた。描き溜めをしなかったのは「新聞は臨場感が命」だから。小渕恵三元首相が急死した日、夜の新聞社に駆け込み、午前2時締切の最終版で原稿を差し換えた。母の日だったので、カーネーションを天国の母上に届けたのだからというオチ。首相の遺族から感謝の連絡が届いたという。

大阪で生まれ、中学生で投稿した漫画が地方紙に掲載された。通っていた学校がその才能に気づき、近所に住んでいた漫画家、サトウサンペイ氏に紹介状を送った。「描いた漫画を持っていくと、喫茶店で添削してくれた。僕だったらこうすると入れてくれた線で、手品のように面白くなった」と振り返る。高校生にして早くも関西の地方紙で連載をもったが、漫画家

になろうとは思わなかったという。

大好きな化学を学ぶため、明治大学農学部農芸化学科に進学。上京後の生活費は東宝の砧撮影所で稼いだ。「雇ってくれた成瀬巳喜男

監督が助監督にするアドバイスを雑用をしながら盗み聞いていた。ファーストシーンで人をひきつけない映画は最後まで観てもつまらない、という話は四コマ漫画にも

通じる。最初の一コマにパンチがなかったらだめですよ」と話す。卒業後、祖父の創業した地元の織維会社に就職。「展示会で超有名な優を2人起用したのですが、どこへ

で差し入れた週刊誌に、連載漫画の募集広告が載っていた。「暇だから」と病床で描いた作品を投稿すると、佳作入選。それを見たサトウ氏から「まだ漫画を描いてい



高校時代から愛用の筆でサラリ君夫婦を描いてみせる

名作を描き続けてきた自宅の書斎



「西村宗の昭和の歴史」の完成作の一部

西村宗 So Nishimura

1936年4月28日生まれ(84歳)。サラリ君は「30年過ぎると味がなくなる」と連載前から決めていた通り2010年で終符を打った。1985年第31回文藝春秋漫画賞、2000年第29回日本漫画家協会賞優秀賞。40年以上住む市内では、東京町田・中ロータリークラブに所属。19年には市民文学館ことばらんどで展示会も開かれた。

るんか。勝負するなら都内に出なさい」とエールが送られ、その気になった。「仕事もなんの保証もない、若かったね」と目を細める。上京後は出版社への持ち込みを重ね、少年誌でデビュー。「仕事がないと描けないし、面白くなければ3回で連載は終了。漫画家は大変な仕事」と苦笑い。サラリ君の仕事が決まった時、新聞連載の大先輩である横山隆一氏から金言をもらった。「素人でもたまに100点の作品が描けるけど、毎日60点のものを描くのがプロだ。では60点未満しか描けない時はどうするんですかと聞き返すと、知らんぷりしとけだ」と笑う。

現在は「西村宗の昭和の歴史」と題した一コマ漫画を作画中だ。「2年前に100点描く約束がまだ30点くらい」と頭をかく。なにせ資料集めに時間がかかる。自宅の蔵書は約7千冊。「想像ではなく事実を押さえて描くには、思想信条で書かれ方が違う各紙の主張や多くの資料を読んだ上で、西村宗なりに事件を判断して描かなければいけない」と語る。ユーモアと風刺を効かせた西村流の昭和史観に乞うご期待だ。

で使ったと思います?会場の受付をしてもらったんです。映画と同じでファーストシーンが大事だから」とにっこり。西村流の演出は会社員時代から発揮されていた。

20代で工場長になった矢先、商品倉庫の荷崩れで下敷きになり大けがを負った。これが漫画家を志す転機になる。同僚が入院見舞い